

町の商業的同質化

— 日本橋久松町のケース —

白石 孝

<要 約>

本稿は前稿の久松町商業史で記した町の歴史の変容に続いて、浜町川堀東西の町の構造や地価という新しい分析を通して、その特徴を一層明らかにしようとしたものである。視点を歴史地理学や都市の空間構造の諸研究を念頭に、筆者なりにこの界隈の町の構造の類型化を試み、長谷川町、富沢町を四方向地割型として、これに織物問屋街化の姿を重ね、街並みの変貌を反映する地価を地番別に分析し、長谷川町・富沢町・高砂町に対する久松町の特徴を指摘し、続いて、織物問屋街化が進み、繁栄期をむかえた大正期にこの町内の地価がどのように変化していったかを見、浜町川堀を隔てた2つの界隈の商業的同質化に言及する。

<キーワード>

織物問屋街、人形町通り、芝居町への道、町の構造、形と地割、歴史地理学、都市史、城下町の空間構造、一方向地割町型、二方向地割町型、四方向地割町型、碁盤型屋敷割江戸型、城下町構造論、浜町川堀、前店、地価小間高、主要街道、河岸、場末、町人地の構造、土地所有変動の地域的差異、土地売買価格、河岸附町人地、地番別地価指数、東京地所明細、北高南低、辻、地籍台帳、町の求心性、外に開いた町、武州豊嶋江戸庄園、龍閑川、東緑河岸、西緑河岸、汐見橋、栄橋、高砂橋、小川橋、久松橋、商業的同質化

はしがき

¹⁾ 前稿では、武家屋敷地から明治になって商業地となったタイプの町の中から、日本橋久松町について、明治・大正期の街並みの変遷をたどり、その歴史的特徴を記した。

そこでは、この町が5つの特徴のあるブロックに分けられ、中央部は、広い大名屋敷の跡に、浜町川堀以東などを学区とする久松小学校や、その管轄範囲が広く小網町にまでも及ぶ久松警察署が設置され、早くから行政上の特異な町として形成されたこと、更に、小川橋の通りに分断され、

1) 白石孝「日本橋久松町商業史覚書」(三田商学研究 46-6)。

浜町側に突出した形となっている南の部分には、明治座の前身の芝居の劇場や芝居茶屋ができるなど、この浜町川堀から大川端にかけての町々はもちろん、日本橋区内でも、その特色はきわだったものであった。しかし、それにもまして注目されるのは、この町が浜町川堀西側の町々の商業的色彩に染ってゆく姿であった。北の部は、人形町通り界限や富沢町の織物問屋街化に照応するように、この種の店が増え、大正にかけては中央部にまで拡がり、まさに富沢町商業圏に包摂された街並みといってよく、南の芝居茶屋のあった辺りは、浜町2丁目と共に、高砂町・浪花町の「よし町花柳街」に包みこまれていったからである。

本稿では更にこうした町の歴史的特性の変容を、浜町川堀東西の町の構造や地価という新しい視点と分析から再検討してみたいと思う。

1. 町の構造の類型

まず、明治・大正期における久松町と浜町川堀西側の町々の略図をかかげておく(図1)。この西側の長谷川町・新和泉町・富沢町・高砂町・浪花町は江戸時代からの町ではあるが、江戸のメインストリートの1つである本町通りや船荷で賑わう堀留川堀から離れた商業的には場末ともいべき町で、明治になって、長谷川町・富沢町などが織物問屋街として発展していった界限であった。したがって、江戸時代には、富沢町といえば古着商の立ち並ぶ町として、また高砂町・浪花町あたりは旧吉原地として注目される以外に、これといった商業史的にとりあげられるものはない。人形町通りにしても、堺町・葺屋町辺りに芝居町があった頃は、本町通りからの横丁で、いわば「芝居町への通い道」程度のもものではなかったろうか。²⁾

しかし、ここに改めて、この界限を、久松町のような明治になって武家屋敷地から町になったものと比較すると、この図からも町の構造(形と地割)の大きな違いがうかがえよう。

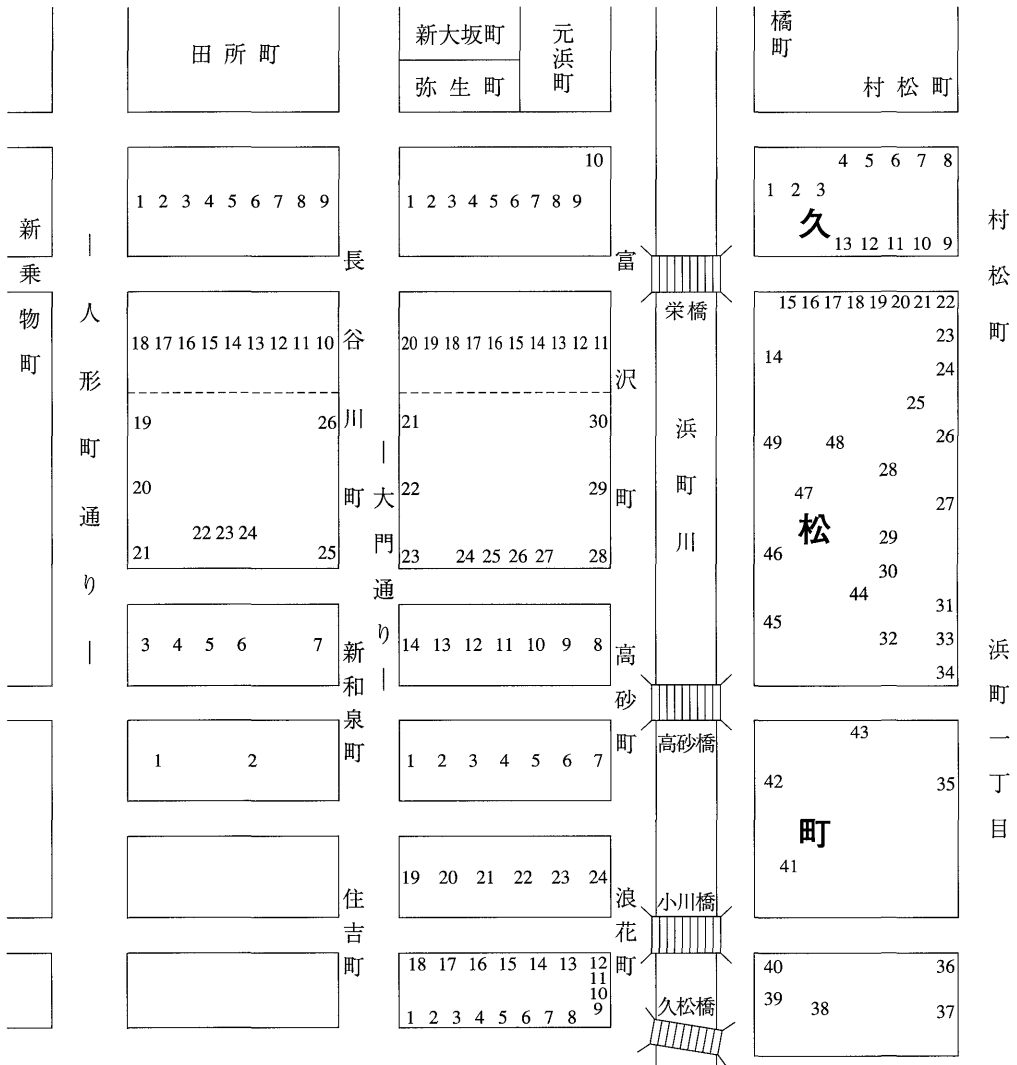
江戸の「町の構造」については、これまでも歴史地理学や都市史の分野で、多くの研究者がとりあげてきたところである。³⁾しかし、その大部分は、城下町の空間構造として、各地の城下町の比較を通し、城郭にむけて町がどのようにつくられてきたか、またこれが時代と共にどう変ってきたかを問うものであった。ここでは、これらの研究を念頭におきつつ、あくまでも、日本橋区内の明治・大正まで残されていた江戸時代からの様々な町の構造を筆者なりに類型化し、浜町川堀西側の町の特徴を描き出したいと思う。

図2は日本橋区内の町にみる代表的な型である。

2) 白石孝『日本橋街並み繁昌史』p.227。

3) 矢守一彦『城下町のかたち』、柴田孝夫『地割の歴史地理学研究』、玉井哲雄「町割・屋敷割・町屋——近世都市空間成立過程に関する一考察」(年報都市史研究2)、小野均(晃嗣)『近世城下町の研究』、中西和子「織豊期城下町にみる町割プランの変容」(歴史地理学42-2)、宮本雅明「城下町の空間類型」(年報都市史研究2)。

図1 明治一大正・久松町と浜町川西側の町略図
数字は地番

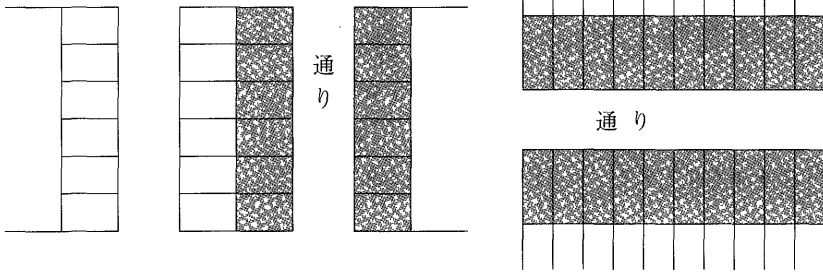


(イ) 一方向地割町型

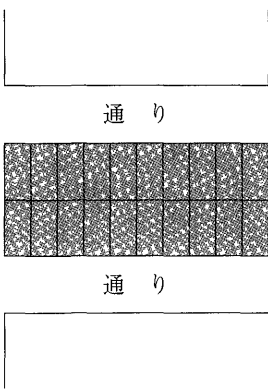
これは城下町の町割の歴史研究にも、しばしば登場する類型、「タテ」と「ヨコ」の通りをはさんでつくられた「両側町」である。通町や室町、本町・本石町・横山町・馬喰町など、江戸のメインストリートの街並みがこれである。江戸の商業地の中心をなすのが、こうした町であったことはいうまでもない。

図2 町の地割模型図 (同一町内)

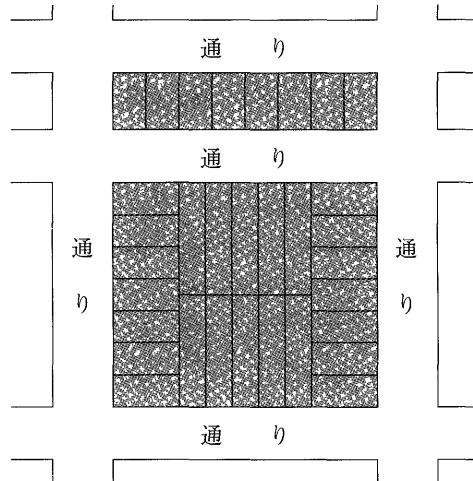
(イ) 一方向地割町型



(ロ) 二方向地割町型



(ハ) 四方向地割町型



(ロ) 二方向地割町型

矢守一彦の「城下町のかたち」での短冊型⁴⁾のように、二方向の通りに面をもつ町である。例えば、新乗物町、小伝馬町、高砂町のような町々がこれに類するであろう。

(ハ) 四方向地割町型

四方向の通りに面して、これに口を開くように地割したブロック型の町である。秋山国三のいう京都の「四面町」⁵⁾とってよいかも知れない。もっとも矢守一彦のモデルでは、「碁盤型屋敷割」の「江戸型」⁶⁾に類するが、本稿の図1の長谷川町や富沢町のように、それは1つの町が2つの部分

4) 矢守一彦前掲書, p.41.

5) 秋山国三・仲村研『京都「町」の研究』p.153.

6) 矢守一彦前掲書, p.41.

から成り、そのうちの1つがこの四方向地割町型になっているのが普通である。ただ、日本橋区内ではこのタイプのものは数が少く、上記の町以外には日本橋南之部の新右衛門町や箔屋町、人形町通りでは図1には省略されているが田所町がこれである。

こうしてみると、この四方向地割町型に類する町は、メインストリートにはなく、これから離れたいわば二流の商業地の町型といえる。歴史地理学の分野の「城下町構造論」では、こうした町は、⁷⁾実質的には「城下の外」とみなされるのであった。

事実、長谷川町・富沢町のような境界の商業価値は著しく低かったといえる。すでに述べたように、堀留川堀河岸から離れているし、江戸商業道路の本町通りからも横にそれ、人形町通りや大門通りにしても、その南先は大名屋敷地で、日本橋大通り境界に出るのには、よし町河岸から東堀留川堀にかかっている親父橋を渡って小舟町を経て、更に西堀留川堀の荒和布橋を渡ってゆかねばならなかったからである。もちろん、この境界の東には浜町川堀があり、舟運が利用でき、河岸をもっていた点では、河岸をもつ町としての有利さはあったことは確かである。実際、寛保沽券図にも、その河岸に「前店」と記されており、「ゆったりとした地割をもつ町」として描かれているとい⁸⁾う。この浜町川堀については後に詳しく検討するが、やはり富沢町の商業上のロケーションにとっての特徴は、この入堀の東側には、橋町を除いて、大川（隅田川）まで武家屋敷地であったことではなかろうか。

しかし、このようなロケーション上の問題は明治になって一変する。人形町通りの南には蛸殻町（今の人形町）が生れ、茅場町との間が橋で結ばれ、もはや人形町通りは、江戸時代のどんずまりの通りではなくなるばかりか、そこに水天宮や米穀取引所などをもつ賑やかな新しい商業地が生れたからである。またこれまでも本誌に覚書として取り上げてきたように、浜町川堀の東側一帯は武家屋敷地から町へと変り、特に富沢町にとってみれば柴橋を渡った通りは、新しい商業地が展開するに至る。前稿における久松町はまさにこの隣町であった。そして、再々述べたように、人形町通り、大門通りに接する町々は、明治の中頃には、次から次に織物問屋が群生する。明治27年頃には、この境界の織物問屋の数は、田所町、新大坂町を含め195店にのぼる。

2. 明治期における町内地価の特徴

こうした明治におけるこの境界の街並みの変貌は、当然この町々の地価に反映する。そこで、明治一大正期のこの境界の地価の特徴と久松町のそれを、町の構造に沿って記してみたい。

日本橋区の町の地価とそのロケーションについては、江戸時代の研究として、玉井哲雄『江戸町人地に関する研究』があり、そこでは延享期の小間高によりその地域の特徴を詳細に分析している。

7) 柴田孝夫『地割の歴史地理学的研究』p.263。

8) 「各沽券図の特徴と見どころ」『中央区沿革図集』p.61。

これによると、

(1) 本町から浅草橋に至る本町通りに面した大伝馬町1・2丁目、通旅籠町が中屋敷で小間当り2・300両で、一筋北の本石町通りに面した小伝馬町1・2丁目の100両以下に比べて2倍以上もし、日本橋大通りに面した通1丁目も中屋敷で260両と、本町通りと同様に高い。それは主要街道に面した町屋敷だからである。

(2) 主要な堀に面した河岸地にある町屋敷の小間高も高い。

(3) 本町通りや入堀にも面していない裏側の町屋敷の場合は小間高は相対的にかなり低い。

(4) もっとも、こうした小間高の評価も、街路や水路以外の個々の条件により違いを生ずる。例えば、堺町・葺屋町が他の裏通りより高値を示すのは、ここが芝居町であるためだし、大伝馬町から一筋裏通りにあるだけなのに小伝馬町がかなり低値なもの、小伝馬町牢屋敷があることによる。また最低の小間高を示す住吉町、灘波町、新和泉町、高砂町などは、みな吉原移転後も場末的なところであったためであるという。

そして帰るところ「日本橋町人地の構造の特徴は、本町通りや日本橋通りのように、当時、問屋商人を中心とする大商人達が店舗を並べていたと考えられる繁華街と、日本橋川や伊勢町堀に面した河岸蔵の並ぶ物資運搬上の要地が、町人地の中心部分を構成しており、これら商業活動及び水運の便からはずれた裏通りとは画然とした差があった⁹⁾」という。また、中藤淳は「江戸町人地における土地所有変動の地域的差異」論文で、実際に売買された値段で、京橋・築地地区を分析し、その結果を4つの地域に分けてその相違を明らかにしている。日本橋区の町ではないが、本稿にこれから記す町の特性と関係するので、その要旨を記すと¹¹⁾

(1) 表通りの町人地＝尾張町4丁目は経済的に大商人が進出して来る地位の高い町人地で、初期に土地集積が進み、その後、売買が不活発になったが、売買価格が高騰した地域。

(2) 河岸附裏通りの町人地＝新肴町は、町人の日常生活に密着した商店が多い反面、問屋がなく、経済的に地位が低い町で、時代と共に土地売買件数が増加し、価格が不安定に上昇した地域。

(3) 河岸附町人地＝木挽町3丁目は、河岸附なので経済的地位が高い筈なのに、土地売買も低調で問屋が一軒もなく俗化された盛り場。

(4) 場末的町人地＝南小田原町1丁目は築地の西本願寺や武家屋敷に囲まれたまさに場末の一画で、(2)より更に経済地位の低い地域。

このように、玉井哲雄は日本橋の沽券絵図から、中藤淳は土地の売買から京橋地区について、ロケーションからの地域特性を導き出したが、本稿で取りあげている界隈の町としての相対的位置づけも、ほぼこれにより描かれているところと考えてよからう。

9) 玉井哲雄『江戸町人地に関する研究』p.38。

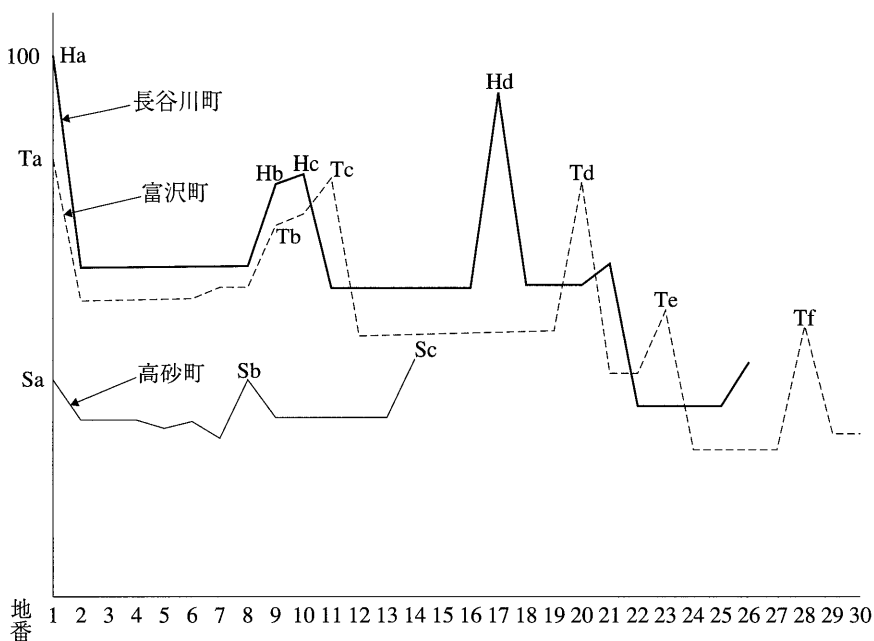
10) 中藤淳「江戸町人地における土地所有変動の地域的差異」(歴史地理学 134)。

11) 陣内秀信・安富弘樹『「橋のたもと」と「辻」の都市空間』(歴史手帖 1985-13-2, p.57)。

図3 (イ) 長谷川町・富沢町・高砂町地番別地価指数グラフ(明治23年)

長谷川町1番地=100

附号の箇所(口)参照

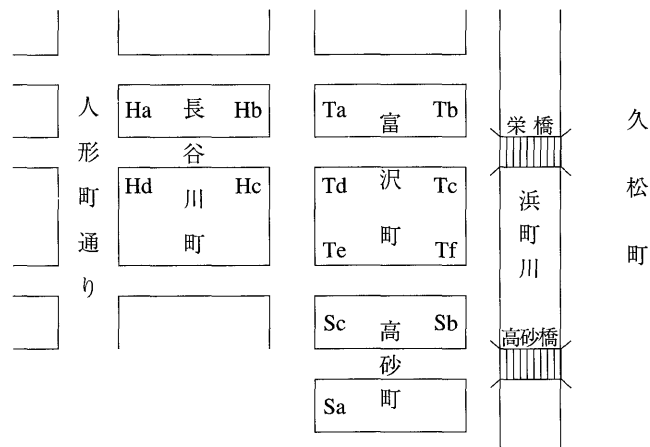


そこで、本稿では更にこの浜町川堀西側のうちの3つの町——長谷川町・富沢町・高砂町と久松町について、明治・大正期の地価とそこに現われた町の特徴を検討しておく。

図3は(イ)から(ホ)まで5つの図から成っている。(イ)は長谷川町・富沢町・高砂町の地番別地価指数グラフである。地価は明治11年9月に発刊され、明治23年11月に改正された「東京地所明細」から、長谷川町の最も高い地価100坪当り1,377円を100とした指数を各町別にグラフ化したものである。ここには長谷川町を基準にしているが、もうこの時期には、この境界の商業的価値はあきらかに上昇しているといってよい。江戸時代では、すでに述べたように、まさに玉井哲雄の評価を引用したように、本町通りの通旅籠町と人形町通りを入った境界の地価とは、かなりの差があったが、この明治期では「東京地所明細」によると、通旅籠町で最も高い1番地が100坪当り1,464円になっているから長谷川町の1,377円はその差が縮少してきたとみてよからう。

この(イ)図の長谷川(実線)と富沢町(点線)の形状から、2つの町の構造上の特徴が指摘できる。1つはいずれの場合も、地番からみて北高南低である。それはこの境界の性格を示すもので、高砂町に近くなる辺りになると、商業上の土地評価も低くなることを示している。今1つは、長谷川町も富沢町も、地番上の多少のずれがあっても、パターンが同じだということである。そこで、この2つの町のグラフの上に、相対的に地価の高い箇所に附号をつけ、これを両方の町の図にマークすると、(ロ)のような図になる。長谷川町では人形町通りに面する角地Ha、Hdと大門通りに

(口) 長谷川町・富沢町・高砂町の高地価箇所
 (図1の地番参照)



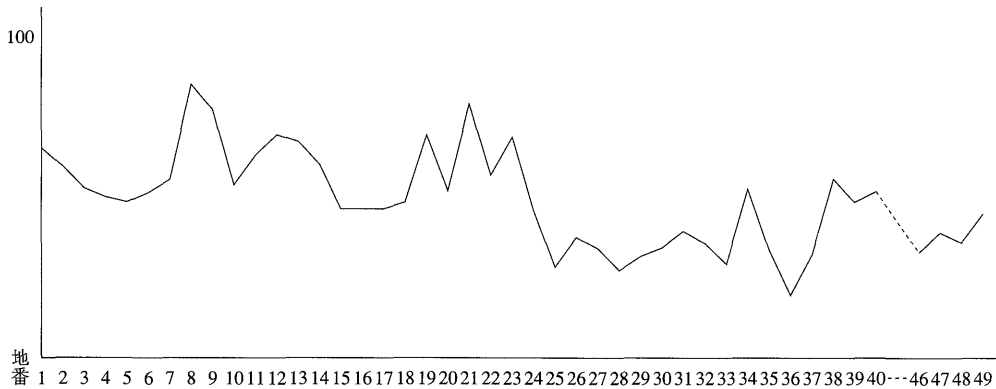
面する Hb, Hc である。また富沢町では大門通りの角地 Ta, Td, Te と浜町川堀の通りの角地 Tb, Tc, Tf であった。特に富沢町の Tb と Tc の箇所は単なる角地だけではなく、栄橋のたもとでもある。これについては都市の空間構造として陣内秀信・安富弘樹の『「橋のたもと」と「辻」の都市空間』という論稿があり、鍛冶橋近辺の町の地価から、同じ地区でも「橋のたもと」が一般的に最も高く、それに次で「辻」に面した角地の部分が高いと指摘する。ここでの富沢町では「橋のたもと」と「辻」の評価上の優位さはないが、やはりこの2つの箇所が相対的に高くなっていることはうかがえる。高砂町もこのグラフで示されるように、長谷川町や富沢町に比べて全体として地価の水準は低い、やはり大門通りに面する角地の Sc, Sa と高砂橋のたもとの Sb が相対的に高くなっている。

図3の(ハ)は明治に生れた本稿までの対象地域・久松町の地番別地価グラフである。それはこれまで述べてきた江戸時代にできた町の構造と根本的に異なり、地番の配置が不規則である。これこそ久松町のように、大名屋敷地が中心になってできた町の共通の特徴といってよい。浜町もそうだし、矢の倉町もこのタイプである。

久松町の場合は、図1のように、1番地から村松町の側に8番地まで、9番地から22番地まで栄橋の通り両側、これから浜町1丁目の側に沿って37番地までと南に下り、38番地から浜町川堀側の土地を北にむけて地番がつけられている。その故もあって、(イ)の長谷川町や富沢町、高砂町とは異ったグラフの形状をなしているが、地価が相対的に高い(グラフでの山)ところは、8番地・9番地のような角地、栄橋通りに面した箇所、高砂橋通りと浜町1丁目側の通りとが交差する角地の34番地である。こうした町の中で地価の高い箇所は、江戸時代からの町の場合と別に大きな違いはない。

(ハ) 久松町地番別地価指数(明治23年)

長谷川町1番地=100 ----- 公有地につき欠



しかし、(イ)の長谷川町や富沢町、高砂町にあっては、町の中に突出して高いところがところどころあっても、指数グラフの示すように、いくつかの地番が、同じ地価になっているのが一般的である。例えば、長谷川町の1番地は高くとも、2番地から8番地までは、同じその61.4%と変わらず、11番地から17番地までは同じく51.7%の地価である。これは富沢町や高砂町についてもいえるが、他方、久松町はどうかというと、地番ごとに地価がみんな異っている。これもここが、かつて様々な身分の武家屋敷地であったことを反映したものとみてよからう。

3. 大正期の織物問屋街化と地価

それでは、長谷川町・富沢町が織物問屋街化した明治中期から後期には、この界隈の地価はどう変化したであろうか。図3の(ニ)は、織物問屋が群生し繁栄への道をたどっていった大正4年の「地籍台帳」¹²⁾から作成した(イ)と同じ地番別地価指数グラフである。ここでは、前期とどれだけ地価の水準が騰落したかは敢えて問わず、界隈の3つの町のこの時期における各地番の相対比較を対象とする。

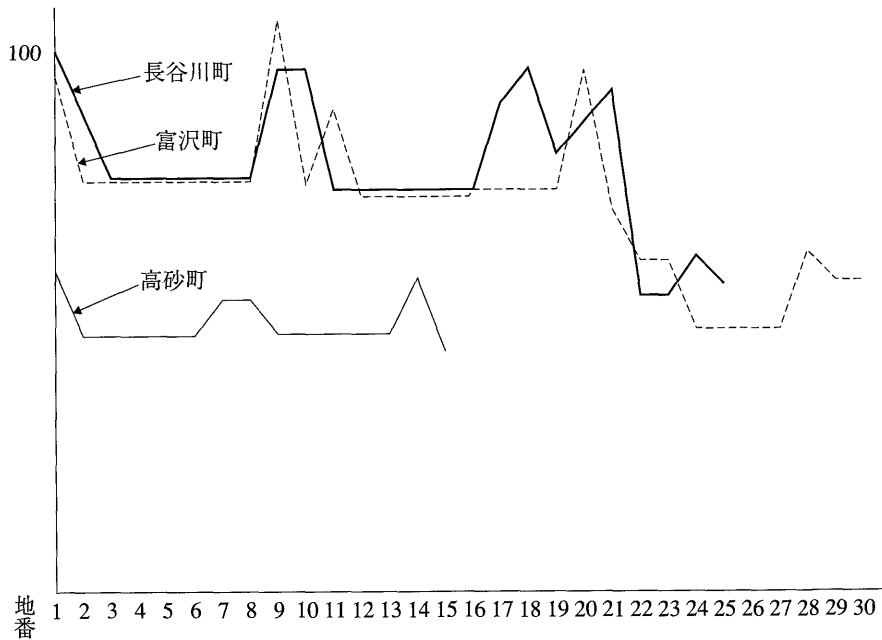
この大正4年の(ニ)の図と、明治23年の前図(イ)を比べると、まず著しい変化と思われるのは、すでにその背景を述べたように、長谷川町の人形町通りに面している箇所が、総じて地価があがっていること、今1つは、長谷川町と富沢町との格差が縮少し、柴橋への通りの地所がほぼ同水準になっていることである。これもやはりこの界隈の織物問屋街化を反映するものにほかならない。

この時期における久松町の地価は、図3の(ホ)の如くである。これを前図(ハ)の明治23年の時と比べると、大きく変化している。富沢町辺りとの地価の差は依然として変りはないが、この

12) 『日本橋区史』第1冊，大正4年土地台帳。

(二) 長谷川町・富沢町・高砂町地番別地価指数グラフ (大正4年)

長谷川町1番地=100



(ホ) の図のように、大正4年の時には、町内のそれはほぼ平準化している。これは、漸く久松町が商業地として安定してきたことを示すといつてよかろう。しかし、これを地域ごとにみると、1番地より23番地までの北の部と、35番地から40番地の南の部分が相対的に高く、明治中期の(ハ)の図と比較すると、特にこの南の明治座のある辺り(前稿の図2のDマークの箇所)¹³⁾の地価が北の商業地にまで上昇してきたことがうかがえる。

この久松町の北の部分の商業地は、すでに述べてきたような、数多くの織物問屋が出店し富沢町商業圏に包摂されたといつてよい地域であった。

そこで、ここにこの界隈の織物問屋にとっての黄金時代といわれる大正7年の、長谷川町・富沢町と久松町の地番別の織物問屋を掲げると表1の如くである。この町々の織物問屋の数は、風呂敷、シャツ、糸類や仲買商などを除き、長谷川町に38店、富沢町に34店、久松町に24店、この3つの町だけで合計96店に達する。もっとも長谷川町をみると、人形町通りに面したところには織物問屋がない。そこには判こ・履物・シャツ・造花・人形・菓子・手拭・ひな人形・薬・下駄などや、21番地の角地には鍼灸治療所・蒲焼・せんべい・糸・人力車・荒物などの店が並ぶ。¹⁴⁾実は、これでわかるように、この頃は今と違って殆どが店住一致で、人形町通りは本来この界隈のこういった居住者が日常買物をする商店街であったといえる。したがって、織物問屋の大部分は、人形町通りから東

13) 白石孝前掲論文(三田商学研究 46-6)。

14) 『大正7年営業者姓名録』による。

(ホ) 久松町地番別地価指数 (大正4年)

長谷川町1番地=100 -----公有地につき欠

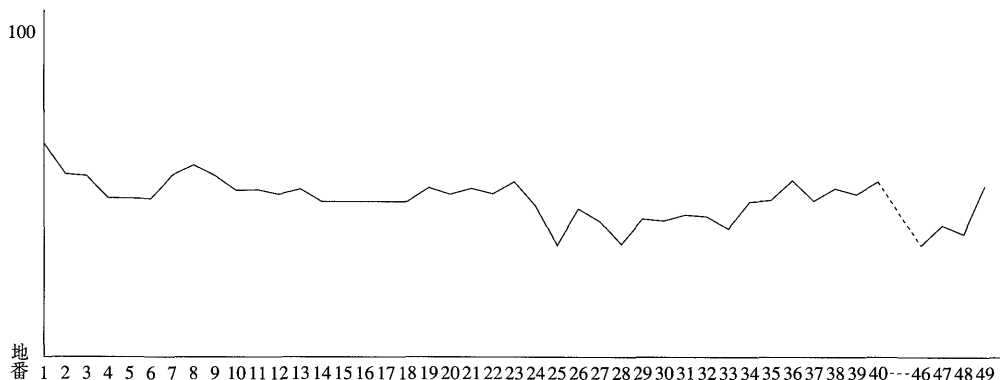


表1 長谷川町・富沢町・久松町織物問屋 (大正7年)

(日本各種営業者姓名録より)

長谷川町	8 外村弥治右衛門	25 内田重次郎	10 鈴木定之助	久松町	20 石崎常吉
番地	9 小杉合名	〃 石原慶太郎	11 中村重太郎	1 栗田庄太郎	35 奥川佐平次
2 松原藤吉	〃 中村与七	26 村越庄左衛門	〃 小杉幸次郎	〃 根本栄次郎	〃 宮川幸三郎
〃 田中源治	10 井上金作	富沢町	〃 大久保久七	〃 森林商店	42 河合億次郎
3 丸山嘉兵衛	11 西村直吉	1 内田金造	12 神野清五郎	〃 西村武兵衛	46 根岸為三郎
4 坂本豊太郎	〃 西村次郎吉	〃 西村与兵衛	15 稲葉忠兵衛	2 佐藤重太郎	49 稲村福太郎
〃 藤野常七	12 川島齋兵衛	2 塚本三郎	16 大久保源兵衛	3 市田繁蔵	
5 荒井駒太郎	〃 瀧川松兵衛	〃 池上栄治郎	17 山添直一	〃 瀧沢新吉	
〃 岡本鍵之助	13 家島猪三郎	〃 亀井喜一郎	18 堀越常七	5 山本嘉七	
6 建石商店	〃 石川三之助	3 不破佐平	19 前川太兵衛	〃 齋藤兼吉	
7 佐々木万太郎	14 山下忠七郎	〃 篠原直七	21 深田与三兵衛	13 東京双子織物	
〃 吉野藤一郎	15 松本豊太郎	4 岡正合資	23 小泉合名	〃 鈴木秀次郎	
〃 家島常七	16 近房商店	7 相沢和助	〃 坂田源之助	14 野口商店	
〃 徳永四郎	17 木内商店	〃 矢島平吉	26 宮川善兵衛	〃 下村合名	
〃 内田重次郎	22 青山平吉	〃 今井久左衛門	28 中野長兵衛	〃 齋藤甚八	
8 山鹿米次郎	23 西村平次郎	〃 阿部三代吉	〃 佐々木商店	〃 小林泰助	
〃 西村定助	24 山本清次郎	8 辻金之助	〃 前田兼七	〃 西彦兵衛	
〃 小西長四郎	25 下田助次郎	9 大橋藤八	29 手島合資	15 齋藤伝四郎	
〃 外村祖次郎	〃 鈴木昂平	10 稲村源助	30 竹内藤吉	17 藤村清助	

に栄橋にむかって入った通りと、大門通りに面した箇所位置していた。富沢町は人形町通りから一本東に入ったこの大門通りに面し、ここから浜町川堀にかけて一面に、織物問屋が軒を連ねていた。本稿の図1の町の略図と照応してみると、この分布がよくわらう。

それでは久松町の織物問屋は町にどう分布しているかという、同表からめだつのは、栄橋の通りと浜町川堀に面した北から14, 49, 46, 42の地番の箇所である。これからしても、この町が富沢

町の織物問屋街の一面といってもさしつかえあるまい。しかも、これは前稿でも指摘したように、この町の織物問屋は入れ替りが著しいのが特徴であった。その結果、久松町は次第に居住者の町への求心性・独自性を失っていったように思える。確かに、今日でも「久松町」といえば、「久松小学校」と「久松警察署」が念頭に浮ぶにすぎないといっても過言ではない。かつて筆者が村松町を「内向きの町」、久松町を「外に開いた町」と特徴づけたことがあるが、上記の性格は更にこれを裏付けるものといつてよかろう。¹⁵⁾

久松町にしろ、富沢町にしろ、この特徴を描く際に、無視できない地誌的な背景は、やはり、これらの町の間で流れている浜町川堀ではなかろうか。

しかし、日本橋区が河岸の集合体といわれ¹⁶⁾、浜町川河岸とされつつも、この河岸やその水路の具体的な利用の実態についての資料は乏しい。

この川堀は大川から箱崎川に入る途中の川口橋から北折して開削されたもので、寛永の頃は、まだ後の橋町1丁目となる西本願寺のあった辺りまでしか通っておらず、武州豊嶋郡江戸庄図をみると、この堀は寺院の手前から吉原遊廓をぐるっと囲むように造られていただけである。この東側はすべて武家屋敷であったから、この頃の浜町川堀はまだ真に町家の水運に供するものではなかったと思われる。しかし、この吉原遊廓も明暦の大火で焼失し浅草に移転させられ、町地になって、囲いの堀も埋められ、へつつい河岸だけが残される。そして元禄に入ってから更に北にむかって開削されて龍閑川と鋸形に結ばれるに至る。¹⁷⁾こうなると、この堀の価値は大きく変わり、小舟による水運が盛んに利用されるようになっていった。橋町あたりの堀は汐見橋や千鳥橋がかかり、この一帯は「河岸」に変わっていった。北の竹森橋から南の栄橋まで「竹河岸」とよばれていたようである。¹⁸⁾明治にはこの堀の東側を「東緑河岸」、西側を「西緑河岸」と称したように、長くこの堀は荷の積み降しに賑わったとみられる。もともと、この堀は汐見橋あたりまで海からの汐が差しのぼってくるものの、人家の汚水の吐け口でもあり、土砂や芥が埋まり、川凌いをしないと、舟の運行は満ち汐のときでないと困難であつたらしい。¹⁹⁾

明治16年、更に水路が延長され、大和町と東龍閑町と豊島町の間を貫いて神田川に合流され、鉄道の駅・須田町一神田川一浜町川堀の水運の便に供せられるに至る。この頃の浜町川堀の様様については「岸の上、左右には高く石垣が築かれ、別に柵壁は設けておらず、所々に商家が各自の揚場をつくって、舟で運ばれた貨物を直ちにここから陸揚していた」といわれる。²⁰⁾

15) 白石孝「日本橋村松町・久松町商業史覚書」(三田商学研究 43-2 p.11)。

16) 鈴木理生『江戸の都市計画』p.240。

17) 鈴木理生編著『江戸・東京の川と水辺の事典』p.388。

18) 綿谷雪『考証江戸切絵図』p.198。

19) 『東京市史稿』(覇都時代の港湾) p.389。白石孝「日本橋橋町商業史覚書」(三田商学研究 41-6 p.71)。

20) 石川悌三『東京の橋』p.142。

本稿の富沢町・高砂町側と久松町とを結ぶこの浜町川堀の橋は4つであった。栄橋は綿谷雪によれば、寛永以来寛文までの諸図には、それより北方の東堀留川の萬橋に通ずる道筋に描いているが、元禄のはじめ、この水渠の奥が開削されたときから位置を変え、享保年代頃までは、まだ正式の橋名はついていなかったらしいとい²¹⁾う。そしてこれが栄橋と公称されるようになったのは明治以降のことであった。これに対して、高砂橋や小川橋はすでに元禄中にその名があるが、『東京府志料』によると、これらの橋の長さは、小川橋が8間、他は10間とあるから、この浜町川堀の幅は実際は15メートル前後ではなかったかと思われる。また久松町にとってのもう1つの橋は、浪花町より前稿にも記した喜昇座に始まる芝居町ともいべき久松町南部に架けられた「久松橋」であった。

しかし、このような浜町川堀は、明治になって、東側の町の誕生とまって、東西の町々を隔てるものというよりは、これまで詳述してきたように、商業的には、この両者の町の商業的同質化のそれこそ重要な橋渡しをするものではなかったか。栄橋を通じての富沢町の織物問屋商業が、また小川橋・久松橋を通じての浪花町辺りの花柳街の久松町への伝播は、なによりもこれを物語るものといつてよからう。

21) 綿谷雪前掲書、p.198。